

京都大学	博士（文学）	氏名	鈴木 赳生
論文題目	<p style="text-align: center;">ポスト多文化主義時代の共存： 現代カナダにおける先住民－非先住民の関係再生の空間へ／から</p>		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究が取り組むのは、「対立するカテゴリに分け隔てられた人々はいかに同じ社会空間で共存しうるか」、という問いである。本研究ではこれを「カテゴリと共存の問い」と呼び、理論・事例両面での研究をとおして、この問いへの応答を試みる。</p> <p>そのための切り口としてまず第一部では、多文化主義研究の成果をふりかえり、カテゴリと共存の問いに応じる理念としての多文化主義の意義と限界を見定める（1・2章）。この前半部の作業をとおして得た知見を活かしながら、第二部はカナダにおける先住民と非先住民の共存を事例に、カテゴリと共存の問いをより具体的にあつかっていく（3・4・5章）。導入となる序章では、この二部それぞれの見通し、本研究全体の見取り図が述べられる。</p> <p>1章では、国民国家の他者する理念として多文化主義を位置づけ活用しようとする編入の社会学を概観したうえで、こうした編入志向から距離を取ってきた多様な多文化主義研究の蓄積を掘りおこし、本研究に活用しうる視点や論点を取りだしていく。まず1節では、編入の社会学の現代的展開として注目しうるふたつの潮流、すなわちジェフリー・アレクサンダーからピーター・キヴィストに至る編入様態論（1-1項）、タリク・マドゥードを中心に「ブリストル学派」とも総称される一連の多文化主義論（1-2項）を押さえる。これに対して2・3節では、そうした議論や実践の枠組み自体に批判的な諸研究の潮流が整理される。具体的には、2節では多文化主義の編入的性格に疑義を投げかけた批判的多文化主義論、3節では国家への編入ではなく日常的共存に注目する日常多文化主義研究などが取りあげられる。先住民のように国民国家への編入そのものに異を唱える人びとに着目し、編入論に批判的な本研究では、2・3節でみる別様のアプローチが以降の行論へとつながっていく。</p> <p>2章では、カテゴリによる人の生の決定性と非決定性を同時に視野に入れながら、対立カテゴリに分けられる他者同士の関係構築をさぐる社会思想を探究する。この作業は具体的には、人類学者・社会思想家ガッサン・ハージの議論を介しておこなわれる。編入論的な多文化主義言説の批判者としてひろく知られるハージだが、本研究ではむしろ彼が近年展開する「オルタ論」に注目し、研究全体を貫く視点として活用していく。オルタ論は植民者／被植民者、勝者／敗者といったカテゴリ的対立の思考のみでは敵対関係から抜けだせない状況に対し、人びとがそれのみに囚われずに関係を築く可能性を示す。2章ではこの試みを、身体を介した現実経験の多元性や身体の柔軟性といった点をその中核とみなす見地から再構成する。1節ではまず、オルタ論にとっ</p>			

て基調となる発想を具体例を交えて説明する。2節ではハージ自身のオルタ的探究のまとまった議論として、多文化主義批判の先に彼が模索する存在様態の議論に照準をあわせ、彼が十分に論じていない点も補足しながらこれを再構成する。3節、4節では以上のハージの議論をあらためてみつめなおし、現実経験の多元性や身体の変異性に注目する思想として、著者自身の視点からオルタ論のイメージや本研究での用い方が明確化される。

以上の第一部からカナダにおける先住民－非先住民関係を事例とする第二部へ移行するが、このままでは両者はスムーズに接続されない。そのため本研究では2章と3章のあいだに移行部を設け、第一・二部の接続関係を明示する。

3章では以降の行論の政治社会的背景として、カナダにおける先住民をめぐる政治状況の変遷を重要な点にしぼって再構成するとともに、現代先住民運動の動向を概観する。1960年代以降のカナダにおいて、入植者政府（カナダ連邦・州政府）にとって従来は明らかに「同化され消えゆく者」であった先住民の政治的位置づけは、先住民による土地闘争の隆盛やその結果出された判決等に影響され、「固有の権利を承認されるべき者」へと変わっていく。しかし同化から「承認」へ、と特徴づけられるこの変化も、先住民の政治勢力を無力化し土地の収奪をつづけるという、入植者政府を基礎づけ突き動かす植民地主義を変えたわけではない。3章ではこの表面上の変化と、入植植民地統治の構造上の連続性をとらえる。まず1節で1969年以降という本章が対象とする時期設定とその理由が述べられたうえで、2節では「承認の政治」の制度化と主流化、その問題点について先行研究の成果をまとめながら論述する。3節ではカナダ政府によって先住民と非先住民、国家との「和解」が提唱される1990年代以降の状況を述べ、この政府主導の「和解」に異を唱えたIdle No Moreという先住民運動の姿を描き、4節で小括をおこなう。

3章を土台として、つづくふたつの章では、序章で導入された先住民・非先住民をめぐる「再起」と「和解」をキーワードとして、先住民思想・運動の研究にもとづく議論が展開される。先住民独自の価値にしたがって先住民の生・社会を再創造しようという再起、先住民と非先住民の関係の再生を図る和解は、それぞれカテゴリと共存という本研究のふたつテーマと重ねて考えられる。第二部は両者に注目しつなげて考えることで、第一部で概論的に展開したカテゴリと共存の問いに対する本研究の議論を、より具体的な文脈に落としこんでいく作業となる。

4章ではカナダ出自の多文化主義論者の思想を再起の思想と対比させ、両者がいかにその前提から異なるかを明らかにする。再起の思想は植民地統治が社会のすみずみまで浸透することで当然視されるようになった支配的な社会認識や価値を一度学びほどこき、自分たちにとって重要な価値や倫理をあらためて選びとり創造し、先住民の社会と生き方を再構築していく。このように先住民の立場に立った再起の思想と、入植者国家の構造を所与とする多文化主義思想、これらの前提から異なる思想同士を対比さ

せることで、本章は両者がよって立つ思考の基盤（発想や世界観）の相違を浮きぼりにし互いに相対化させる。この作業をとおして、先住民が示す差異が国民的同一性へと回収されるひとつの偏差に過ぎないのではなく、思考や実践の前提、価値といったより根源的な次元の差異をふくんでいることを示す。まず1節では、この比較を方向づける「思想の対話」という基本的アイデアを述べる。次に2節では、再起という概念を明確に打ちだしひろめていく中心となったアルフレッドの思想を、再起の思想群におけるひとつの起点として導入する。そのうえで3節では、それぞれキムリッカとシンプソンの思想を、女性の自由と文化的規範の相克という争点を軸に比較対照していく。4節ではこれらの議論を簡潔に総括する。

5章では、著者自身が部分的に訪問・参加したウェツューウェテン（Wet' suwet' en）主導の反パイプライン運動を事例として、草の根の和解の可能性について論じる。カナダ最西部に位置するブリティッシュ・コロンビア州、その内陸部の土地と関係をもつウェツューウェテンの人びとは、かれらの関係する土地の真ただ中を横切る石油・天然ガスパイプラインの建設に抗する運動を展開してきた。一部の人びとは建設予定ライン上にキャンプを設置し暮らすことで建設を阻止するという直接行動を開始し、この活動はすでに10余年つづいている。この運動の主体・運営役は先住民だが、運動参加者のおおくは多様な非先住民であり、そこではさまざまな人びとが入りまじるまさしく「多文化」な空間が形成されている。5章ではこうして先住民・非先住民がともに生きる空間に、国家主導のものとは異なる関係再生の契機を見出す。まず1節では、議論の背景となる状況を概観する。そのうえで2節では著者が実際に訪問したキャンプの内実に踏みこみ、おおきな対立の語りからはとらえられないような、共同生活における潜在的な関係再生の可能性が示される。3節では、以上の描写を前章までで展開してきた議論とむすびつけながら、キャンプ運動への参与をとおして得た著者の発見とその意義が明確に提示される。

終章では本研究全体の議論を総括し、序論で提示した「カテゴリと共存の問い」に対する本研究の答えを明確化する。オルタ論の視点に立ち、生活運動において創発的にうまれる先住民と非先住民の連携に着目してきた本研究では、異なる人びとが互いの内実に踏みこみ深い理解や共感に至らずとも、互いに深く立ちいらぬまま成立する共存をとらえた。植民地化以後、同じ川を共有せざるをえなくなった先住民と非先住民の船に必要なのは、両者を結合させる強力な統合主義ではなく、対立や分離的契機を見据えた関係の再構築である。カテゴリ的対立・分離を否認するのではなく、逆にそればかりに囚われてしまうのでもないゆらぎが、異なる人びとの共存を可能にする。これが、「カテゴリと共存の問い」に対する本研究の答えである。

(論文審査の結果の要旨)

前世紀末からの急激なグローバル化の進展は、従来の国民国家の内部に社会的・文化的に異質で多様な「移民」集団を大量に生み出した。こうした新しい状況に対応するために注目されてきたのが、多文化主義（マルチカルチュアリズム）の思想と実践であった。多様性と差異の承認をかかげる多文化主義は、1990年代には世界的に脚光をあび多くの国がさまざまな形で導入し定着をはかってきた。しかしながら21世紀に入ると、行き過ぎた「アイデンティティ・ポリティクス」が国民国家内部に非和解放的な分断をつくりだしたとして批判され、排他的なナショナリズムや「自社会第一」というポピュリズムによって否定されてきた。同時に、より平等で公正な関係を志向する立場からもその「統合」主義的な「統治」機能が理論的に鋭く批判されてきた。さらにいったん否定された多文化主義を再度、復活させようとする試みも生まれるなど、多文化主義をめぐる状況は、複雑に流動化している。

こうした状況のなかで、本研究は、多文化主義的思考と実践を批判・否定する立場とも、再生を提起する立場とも一線を画して、多文化主義を「学びほぐす」ことで、異質なカテゴリ間のもう一つの関係性の在り方を「オルタ」モデルと定式化する。それによって、これまでの議論の行き詰まりを理論的・実践的に乗り越えようとする野心的で挑戦的な試みである。またカナダ・ブリティッシュ・コロンビア州の「ファーストネーション」社会における「オルタ」モデルの実践について社会学的なフィールドワークを実施することで、その試みの可能性を示している。

本研究全体を貫く基本的な問いは、「カテゴリに分け隔てられ対立しながらも共存せざるをえない（ポストコロニアルな）状況下で、国民国家内部の人々はいかに共生していくことが可能か」というものである。そのために本研究では、これまでの多文化主義理論の詳細な検討を行い、その批判的考察から「オルタ」モデルの可能性を探求する。そしてブリティッシュ・コロンビア州における多様で異質なカテゴリに包摂される人々のコンヴィヴィアルな関係性のなかに「オルタ」モデルのメカニズムの発動を検証するという段階を踏んで議論を発展させていく。

それぞれの段階で示された社会学的意義は以下の三点である。第一は、従来の多文化主義に対する肯定と否定の議論を批判的に総括した理論的な視角の提示である。これまで多文化主義の思潮には、国家や企業主導の多文化主義を主流としながらも、そこからは批判的に距離を取りつつ実践的必要から戦略的に多文化主義を利用する方向性、あるいはより文化理論的に、カテゴリへの同一化自体を溶解させていくような方向性等互いに対立する方向性が混在してきた。本研究は、この状況の中で支配的であった、国民国家や企業へと多文化を回収していく「リベラル多文化主義」が、他の様々な展開を周縁化してきたことを批判し、後者の中に多文化主義自体の思潮から乖離していく兆しを指摘する。そこに本研究が提唱する「オルタ」モデルとの接続を見出すことで、これまでの多文化主義の多様な思想との連続性を確保するのである。

本研究の第二の意義は、「オルタ」モデルの理論的提起である。オーストラリアの多文化主義を考察した社会理論家ガッサン・ハージは、多文化主義に対する単なる「アンチ」の思考と感情から自身をいったん切り離しながら関与するあり方として「オルタ」論を提唱した。しかしながら本研究は、ハージに依拠しながらも一線を画する。ハージ自身が「オルタ」的になることに失敗し「アンチ」に回帰したとみなしたフランツ・ファノンの思想と実践を再評価し、それこそが「オルタ」モデルの核心とみなすべきと主張した。本研究によると「アンチ」は、（ハージが主張するように）衣服のように自由に着脱できるものではなく、皮膚に刻みこまれた印のように血肉化されたものであり、こうした経験から生じた困惑や行き場のない憤りから出発し、ついには自身を含めた「地に呪われたる」被植民者の皮膚を暴力的抵抗でもって一度焼き尽くし、まっさらな「あたらしい人間」へと生まれ変わる。そうしたファノンの思想のなかに本研究は「オルタ」のエッセンスを見出したのである。

第三の意義は、この「オルタ」モデルが作動している現場として、ブリティッシュ・コロンビア州のファーストネーションの居住地を通るパイプラインの敷設反対運動をとりあげ、それに参与観察することで、異なるカテゴリの住民の「共在」によって生成されるコンヴィヴィアルな協働の萌芽を確認した点である。アルバータからブリティッシュ・コロンビア州までオイルサンドを運ぶトランスマウンテン・パイプラインの拡張計画は、ウェツューウェテンなどファーストネーションが主権を有する土地を利用することへの抗議運動を生み出していった。持続的な抗議運動の中で、ファーストネーションのNGOや多様なコミュニティとともに、かつての入植者の子孫から新たな移民まで多種多様で異質なカテゴリに属する人々を包摂し繋ぐ創発的な集まりが作りだされていった。本研究はその過程に「オルタ」生成の兆しを見出したのである。

このような画期的な意義をもつ研究とはいえ本論に問題がないわけではない。第一にファノンの「オルタ」像の説明にはやや直観的な部分があり、それが単なる「アンチ」と明らかに異質なものであることの論証は十分とは言えない。第二に、本研究が批判するリベラル多文化主義を、権利主張のための「道具」として肯定する構造的弱者は少なくない。こうした多文化主義のもつ複雑な性格への検討も不十分である。第三に、カナダのフィールド調査のなかで、多くのアクターが交錯する複雑な過程が十分に考察されていない点などは、問題点として指摘できる。しかし、こうした弱点については本人も自覚しており、本研究全体の意義を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2021年1月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し公表に際しては当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。